

この号の内容

- 1 麻疹のアウトブレイク発生中
- 2 麻疹症状と予防方法

麻疹のアウトブレイク発生中

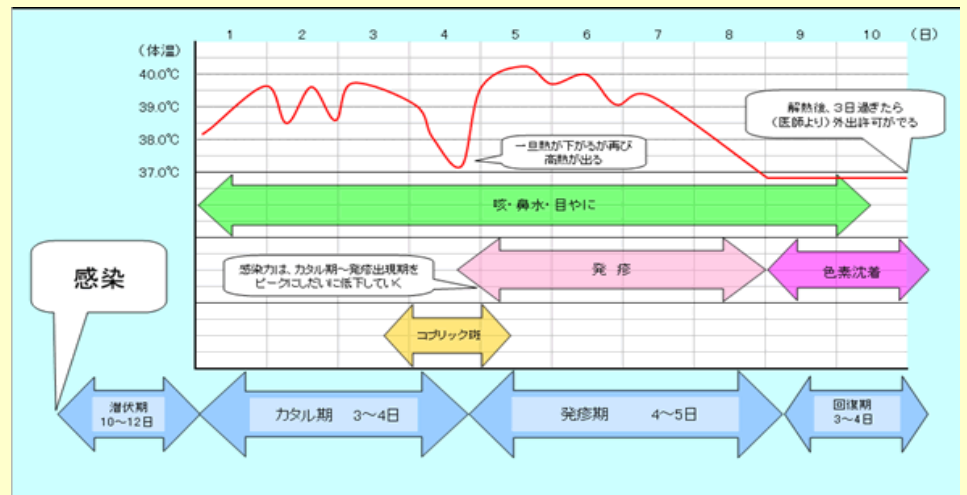
平成 29 年 3 月 18 日宮城県 疾病・感染症対策班は、大崎市の医療機関を受診した患者 1 名に対し実施した麻疹の検査結果が陽性であった事を発表しました。麻疹は「はしか」とも呼ばれており、感染症法では五類感染症に分類されるウイルス感染症です。麻疹の特徴として非常に強い感染力を持っていることが知られており、厚生労働省の HP には「免疫を持っていない人が感染するとほぼ 100%発症し、」と明記されている事よりその感染力の強さを窺い知ることが出来ます。しかし幸いなことに、日本は WHO (World Health Organization : 世界保健機関) により麻疹の排除状態である事を認定されており、麻疹に対し過度に反応する必要はありません。では上記の麻疹発症者はどのような感染経路により麻疹ウイルスに曝露し発症したのでしょうか？

大崎保健所管内での麻疹発症者は初発患者ではありませんでした。現在初発とされる患者はバリ島への渡航歴のある関東在住の男性であると報告されています。この男性はバリ島より帰国後に、山形県南部の置賜地域の自動車教習所で自動車教習を行うために長期滞在しており、この長期滞在中に不特定多数が麻疹ウイルスに曝露された結果となっております。大崎保健所管内で発症した麻疹患者は初発男性と同時期に自動車教習所に滞在していたことが判明しています。この初発男性に端を発する麻疹のアウトブレイクは 4 月 14 日の山形県による発表では、山形県、宮城県、埼玉県、東京都、滋賀県の 1 都 5 県にわたり 59 名が発病したことを公表しています。麻疹は麻疹ウイルス感染後 10～12 日間の潜伏期間を経た後に発症する事が知られているため、最後に発症した患者よりウイルスの排出が終了した後、2 週間程度新規発症者が出なかった場合にアウトブレイクが収束したと考えられます。現在でも山形県では麻疹患者を診察した医師への二次感染や、他の二次感染者が受診した医療機関の職員（職種不明）や偶然二次感染者と同じ日に医療機関を受診した患者への三次感染が報告されております。また別件ですが 4 月 10 日に大阪府健康医療部保健医療室医療対策課は関西国際空港職員の麻疹発症を発表している事より、今後全国的な麻疹発症者報告の可能性があるため大崎市民病院でも麻疹患者の受診や入院に対し備えておく必要があります。

麻疹の症状と予防方法

麻疹は二峰性の発熱が特徴とされるウィルス性疾患です。麻疹ウィルス感染後、10～12 日間の潜伏期間のち発熱や咳などの症状で発症します。発症後は 38℃ 前後の発熱が 2～4 日間継続し、倦怠感を伴いつつ上気道炎症状や結膜炎症状が出現し次第に強くなります。この最初の発熱時期をカタル期と呼び、麻疹の早期診断に有効とされるコプリック斑はカタル期後半に 2～3 日間口腔内の頬部にほぼ出現します。このコプリック斑が出現する時期には一次的な解熱傾向が得られますが、全身性の皮疹を伴う 40℃ 前後の発熱が再度生じます。この 2 回目の発熱時期を発疹期と呼び 1 週間程度継続し、この発疹期後に回復期に入ります。

麻疹症状イメージ図



麻疹は空気感染、飛沫感染、接触感染により感染します。特に空気感染は普段病院で着用しているサージカルマスク（孔径 5 μ m程度）では感染を防げず、よりフィルター能の高い N95 マスク（孔径 0.3 μ m程度）を用いる必要があります。目視の出来ない麻疹ウィルスに対して平素からの N95 マスクの着用は現実的とは言えず、麻疹発症の予防には麻疹ワクチンを用いた予防接種が一般的とされています。現在麻疹ワクチンは 2 回摂取が推奨されていますが、1 回しかワクチン摂取していない世代（26～40 歳）は抗体価が上がっていない可能性や、25 歳以下の世代のワクチン 2 回摂取率は 90%前後であることより、一度自身の麻疹抗体の有無について確認した方が望ましいのが現状です。当院の取り組みとして抗体価上昇が認められない職員に対し麻疹ワクチン接種を実施しています。

また麻疹の飛沫感染、接触感染につきましてはガウン等の防護具や手指消毒により防御できますので、医師・看護師以外の職員も平素からの手指衛生も忘れないようにお願いします。